

引用文献

- 『家忠日記増補追加』 二〇〇二
『尾張志』 一九七九
『尾張徇行記』 一九八四
『改正三河後風土記』 一九七六
『寛永諸家系図伝』 一九八〇
『寛政重修諸家譜』 一九六四
『寛文村々覚書』 一九八三
『尾陽雜記』 一九七七
『張州雜志』 一九七六
『張州府志』 一九七四
『武徳編年集成』 二〇〇二
『松平記』 一九八〇
『三河物語』 二〇〇五
『豊明市史 資料編補二 桶狭間の戦い』 豊明市史編集委員会
『尾張志上巻』 愛知県郷土資料刊行会
『校訂復刻 名古屋叢書統編第五巻 尾張徇行記(一)』 愛知県郷土資料刊行会
『改正三河後風土記(上)』 秋田書店
『寛永諸家系図伝第一、第三、統群書類従完成会
新訂 寛政重修諸家譜第一、第五 統群書類従完成会
『校訂復刻 名古屋叢書統編第一巻 寛文村々覚書(上)』 愛知県郷土資料刊行会
『尾陽雜記』 愛知県郷土資料刊行会
『張州雜志第十二巻』 愛知県郷土資料刊行会
『張州府志(全)』 愛知県郷土資料刊行会
『豊明市史 資料編補二 桶狭間の戦い』 豊明市史編集委員会
『三河文献集成・中世編』 国書刊行会
『瀬戸市史 資料編三 原始・古代・中世』 愛知県瀬戸市

参考文献

- 愛知県史編さん委員会 二〇〇五
宇佐見守 二〇〇八
遠藤才文他 一九九一
岡村弘子 二〇〇七
加藤友康・由井正臣 二〇〇〇
瀬戸市史編集委員会 一九八五
瀬戸市史編集委員会 二〇〇五
瀬戸市史編集委員会 二〇〇七
武部真木・小澤一弘 二〇〇九
戸田修二 一九六六
戸田修二 一九六六
豊明市史編集委員会 二〇〇二
樋上昇 二〇〇五
福島克彦 一九九一
福島克彦 一九九三
『愛知県史 資料編九 中世二』 愛知県
『桑下城跡』 『年報 平成一九年度』 (財) 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
『尾張国古城絵図考』 『愛知県 中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』 愛知県教育委員会
『尾張古城志』 『諸本内容対照一覧』 『城からのぞむ 尾張の戦国時代』 名古屋博物館
『日本史文獻解題辞典』 古川弘文館
『瀬戸市史 資料編一 村絵図』 瀬戸市
『瀬戸市史 資料編三 原始・古代・中世』 愛知県瀬戸市
『瀬戸市史 通史編 上』 愛知県瀬戸市
『桑下城跡』 『年報 平成二〇年度』 (財) 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
『瀬戸古城史談』 『瀬戸市史編』 瀬戸市史編さん委員会
『品野城』 『日本城郭全集七愛知・岐阜』 人物往来社
『豊明市史 資料編補二 桶狭間の戦い』 豊明市
『桑下城跡』 『年報 平成一六年度』 (財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
『桑下城、品野城』 『愛知県 中世城館跡調査報告Ⅰ(尾張地区)』 愛知県教育委員会
『瀬戸の中世城館について』 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要XI』 瀬戸市歴史民俗資料館



桑下城跡全景 (北西から:2008年度調査時撮影)

(六) 高木廣正

『寛政譜』に「長次郎 七郎右衛門 九助 筑後 母は内藤氏。東照宮につかへたてまつり、永祿元年織田右府、兵を發して松平監物家次が籠るところの三河國品野城を攻るのとき、敵將瀧山伝三郎某と鎗をあはせ、その首をうちとりて獻ぜしかば、賞せられて若狭氏房の御刀を賜ふ。」と記載がある。しかし、品野城が三河國になっていたり、打ち取った人物が瀧山伝三郎某になっていたり混乱が見られる。また、それ以前に編まれた『寛永伝』には永祿元年の記載はない。

まとめ

桑下城と品野城が文献資料にどのように記載されてきたかをみてきた。桑下城については、徳川氏創業史や大名・旗本の系譜集には記載がなく、尾張藩内で編集された地誌類や村絵図に記載があるのみである。桑下の地名は『寛文村々覚書』にすでにあり、品野の古称として古くからあったことがわかる。多くの地誌が城主を松平内膳（正）家老永井民部（少輔）としているが、桑下城を桜井内膳正源信定の屋敷、信定の家老を長江刑部、長江民部としている寛政四年の村絵図に注目したい。定光寺所蔵の『祠堂帳』に「科野長江修理進」の名が見え（『瀬戸市史』資料編三、二九一号文書）、永正一五（一五二八）年に科野の有力者として長江氏がいたことがわかる。品野城については、尾張藩内編集の地誌類や村絵図のみならず徳川氏創業史や大名・旗本の系譜集にも記載があり、享祿二年と永祿元年の出来事は広く知られていたようである。ただし内容については微妙な相違がある。特に永祿元年の城主については松平家次と松平信一の二説に大きく分かれる。また、永祿二年の戦いについて記載されたものは『武徳編年集成』の

みであり、永祿三年の戦いについて記載されたものは見当たらなかった*。品野城の呼称については、永祿元年四月の今川義元の感状の科野城を除けば、永祿元年から約二〇〇年後の宝暦二年に完成した『張州府志』が最初である。以上のことから、本来「科野城」「科野の城」として一連のものとして捉えていた桑下城と品野城が、近世のある段階に別々の城と認識されるようになったことで、「科野の城」での出来事がすべて品野城でのこととして記載されるようになったのではないだろうか。そう考えると、仮に永祿元年に「科野の城」の城主として松平家次と松平信一の二名がいても辻褄は合う。この研究成果が今後まとめられる桑下城跡の発掘調査報告書の参考になればと考え筆を執った次第である。

* 『日本城郭全集七愛知・岐阜』（一九六六年、人物往来社）の「品野城」に「桶狭間合戦の前哨戦として永祿三年正月、織田信長の総攻撃にあい、品野三城（秋葉、桑下、落合）は焼き払われて廢城となった」とある。

「二、古城跡森ヶヶ所東西五十間南北六十間秋葉権現森高山は桜井内膳正御居城之由申伝へ候 一、城根と申所内膳正御屋敷之由申伝へ只今御見取畑也 一、桜井内膳正源信定家老 長江刑部部長江民部申伝候 一、御居城之義ハ天文年中之比申伝書付等ハ無御座候得共御位牌祥雲寺ニ御座候 (中略) 一、堀跡ヶヶ所是ハ御城之堀之由申伝へ候」

『尾張徇行記』が引用している「村絵図」はこの寛政四年の村絵図であろう。ここでは、品野城を桜井内膳正の居城、桑下城を内膳正の屋敷とし、桜井内膳正源信定の家老を長江刑部、長江民部としている。

桑下城と品野城に関係する人物

江戸幕府が寛永年間(一六二四～四四年)と寛政年間(一七八九～一八〇一年)に編修した系譜の書である『寛永諸家系図伝』(以下『寛永伝』と略す)と『寛政重修諸家譜』(以下『寛政譜』と略す)に記載された品野に関係する人物について見ていく。

(一) 松平信定

松平清康の叔父である。『寛永伝』に「与一 内膳正 或ハいハく、親盛が兄なり、櫻井と号す。享祿二年(中略)、尾州科野におもて尾州の勢と合戦のとき、清康君の命をうけて、信定・清定先かけとなりて尾州の勢ををひちらす。此軍功ゆへ科野を給ハる。」とある。また、『寛政譜』にも「このとし尾張國品野の合戦にも父子先手にすゝみ、尾張勢をうち破り品野の地を得たり。清康君即ちその地を賜りて信定が軍功を賞せらる。」と同様の内容が記載されている。

(二) 松平清定

松平信定の子である。『寛永伝』では、尾州科野における合戦についての記載は信定の項のみであるが、『寛政譜』には「與一 内膳正 母は某氏。

父と同じく吉田品野等の戦に軍功をあらわす。(中略)妻は織田彈正忠信定が女。」と記載されている。なお、近世地誌類に品野城主として記載される松平家重という別名は記載されていない。

(三) 松平家次

松平清定の子である。『寛永伝』に「監物 永祿元年、大権現、家次に命して尾州科野に居せしむ。尾州の兵附城をきついでこれをせむ。家次夜うちをして、廣瀬衆竹村孫七郎・磯田金平・戸崎平九郎・瀧山伝蔵等を討とる。その外雑兵數をしらず。これにより尾州の敵兵ことごとく敗北するゆへ、かたく科野の城をたもつ。今川義元・氏眞その功を称して感状をさづく。」とある。また、『寛政譜』には「永祿元年東照宮の仰をうけて品野城を守る。織田右府多勢をひきめて城を圍み、四面に砦を構てこれをせむ。家次よく防戦し、三月七日夜討して寄手の陣をうちやぶり、廣瀬衆竹村孫七郎某・磯田金平某・戸崎平九郎某・瀧山伝蔵某等をはじめ五十餘人を討とりしかば、敵軍こらへず圍みを解て敗走す。家次獲ところの首級を駿府に献じて御感を蒙り、今川義元父子も感状をあたふ。」と記載されている。なお、近世地誌類に記載される松平忠次という別名は記載されていない。

(四) 松平忠吉

松平家次の二男である。『寛永伝』に「与次郎 忠正死後、忠吉家督をつぐ。天正九年三月、(中略)、三州の東條と櫻井の論地四百石御加増として忠吉拜領す。そのち又尾州科野にて二千石を給ハる。」とある。また、『寛政譜』には「のちあらためて尾張國品野にをいて二千石をたまふ。」と同様の内容が記載されている。

(五) 松平信一

『松平記』、『改正三河後風土記』、『尾陽雜記』、『張州雜誌』、『尾張志』で永祿元年の、『武徳編年集成』で永祿二年の品野城主とされるが、『寛永伝』、『寛政譜』ともこのことについての記載はない。

総守廣長と合戦し勝利したことが記述されている。

(六) 『尾張徇行記』

寛政四(一七九二)年に着手し、文政五(一八二二)年に完成した村々の調査見聞録で、尾張藩の司農監・書物奉行である樋口好古の著である。上品野村の項に次のようにある。

「上品野城二、府志古城条曰、在上品野村、或作科野、其一村在東南山、東西二十間南北八間余、松平内膳正家重居此、若有隨筆曰、享祿二年、清康君出兵尾州大戰勝之、取品野城賜松平家重、又家忠日記曰、永祿元年三月松平監物家次守品野城、織田信長使兵圍之、四面構塞、七日夜家次出兵劫塞大敗、斬主將數人、尾州軍解圍退散、其後城亦敗矣、其一在村西北、隔河拋山、東西三十間南北四十二間、号桑下城、伝曰、永井民部少輔居此、永井者曾屬松平家重及其子家次、後為織田家臣(中略)一覽書二、桑下古城跡一ヶ所、東西三十間南北四十間、先年松平内膳家老永井民部居城ノ由、今は柴山トアリ○此地村図書上ニハ秋葉権現森東西五十間南北六十間トアリ 一村北片草川ノ北岸ニ城根トイヘル所アリ、是ハ桜井内膳正源信定屋敷跡ノ由申伝エリ 一此村土人書上ニ、往古ヨリ人馬ノ繼場ナリシカ、只今ハ町ノ名バカリ遺レリ、(中略)、又御中屋敷御厩屋敷御の場ト唱フル所アリ、皆内膳正屋敷ニ属セル所ナリ(中略) 一古城志曰、上品野村永井民部少輔城墟号桑下城、伝言桑下者上品野村別称也」

ここでは、『府志』『覚書』『古城志』『村図書』を引用しているが、村絵図では、桑下城跡を城根といい桜井内膳正源信定の屋敷跡と言い伝えていると記載している。

(七) 『尾張志』

天保一四(一八四三)年、深田増蔵正韶らの編著で、古今の文書に記載されている事蹟などを探索して詳細に記述したものである。春日井郡の城のあとの項に次のようにある。

「品野古城 上品野村に二處あり辰巳の方なるは東西廿間南北八間はかり境地今は甚狭し若有隨筆に享祿二年清康君出兵尾州大戰勝之取品野城賜松平内膳正家重」と記し桶はさま合戦記山澄淡路守英重一号風殘翁の元祿のはじめ撰述ありし記なりに先是尾州科野の城をは今川より櫻井の松平監物家次信定の孫清定の子に守らしむる處に尾張方より向城を構へ日夜攻撃之城主家次甚雨の夜敵の油斷を窺て不意に子丑半に付城へ取掛り木戸を打破乱入る尾兵不「思寄」大いに驚き騒ぎ或は同士打し或は柵を越て逃したり因て尾軍の渠帥竹村孫七郎磯田金平戸崎平九郎瀧山伝三郎をはじめ五十余人討死し其外悉向城をすてて北去りぬ義元家次が軍功を褒て感状を給ふと見えたり家重と家次とは父子也松平系圖には家康公の曾祖父左京亮信忠君の弟内膳正信定三河の櫻井ノ郷に住す其子内膳正清定その子監物忠次と見えたり清定家重とも名のり忠次家次とも稱し父子この城主なりし也其後の城主は安土創業録に尾州の士駿河人心を寄せ手を引ければ知多郡多以今川へ降恭す永祿元年戊午三月尾州科野の城に駿河より松平勘四郎信一を大將として三百余籠置尾州よりも科野の城に付城をして日夜せり合ありと見えたり勘四郎信一は信忠の弟松平彦四郎利長三河國藤井郷に住すの子にて伊豆守と稱し後丹波國笹山に隱居す一所は村の西北にありて桑下の城といふ東西三十間南北四十二間永井民部少輔の居城也しよしいひ伝へたり永井は松平家重又其子家次に仕へ後に織田家に屬す」

ここでは、『桶はさま合戦記』『松平系図』『安土創業録』を引用している。永祿元年時の城主を松平信一とするものの、他の地誌でこの時の合戦として記述される内容と同様のものを松平家次が城主であった時とするなど混乱が見られる。

(八) 「春日井郡上品野村絵図」

作成年が明確な村絵図として、寛政四(一七九二)年二月と嘉永七(二八五五)年四月に作成されたものが知られている(『瀬戸市史資料編一 村絵図』)。特に寛政四年の村絵図には「絵図面別紙之覚」が付載しており、その中に次のような記載がある。

いが、永享二年に松平清康が品野城を松平家重に与えたことと、家忠日記からの引用で、永禄元年の織田信長攻撃時の品野城主が家重の子である松平監物家次であったことが記述されている。一方、桑下城主永井民部少輔は家重・家次に属し、後に織田家臣になったとしている。

(四) 『尾陽雜記』

尾張国に関する風土、神社、仏閣、古城、系譜、記録、詩歌等を収録したもので、著者は水野守俊と伝えられている。

「品野城 春日井 一本科野 東西廿間南北八間。但山城上品野村より辰巳の方松平内膳居城云々。イ村より城まで百五十間但山路をうつ 同處田村。東西三十間。四十二間。四方一重堀。城上品野村より西戌方川向。上品野村より城まで川原を直にうつて廿間。桑名の城と云は、上品野村惣名松平内膳家老永井民部居城。(中略) 科野 春日井郡並井 岩崎 清康廿歳の時尾州へ出勢、岩崎品野の郷を攻取り、品野を内膳にあたへ、給。永禄元年戊午三月尾州科野城に、駿河より松平勘四郎大将にて三百の勢を籠。又笠寺城に、駿兵葛山備中守元氏、三浦左馬助、飯尾豊前守・連、浅井小四郎四百余の勢にて楯籠。然処に、尾兵科野の城に付城を拵、日々夜々のせり合也。或時松平勘四郎城より夜討に出、尾州勢を討、城の内の物かしら竹村孫七、磯田金平、戸崎平九郎滝山伝三三四人をはしめ、よき者五十余人討取、無「比類」致「高名」、義元御父子より勘四郎に感状を賜云々。(中略) 水野。城。東西。南北。近は磯村左近居」之云々。承久記。山田重忠カ手、水野左近荒左近荒居歟。大金太郎。五万石ノ城と云、城主これより科野へうつる。」

（こ）では、永禄元年の科野（品野）城主を駿河より派遣された松平勘四郎（信一）としており、『張州府志』と異なる。また、討取った敵兵名が記されるなど戦いの内容が詳細になっている。これとは別に、水野（五万石）城主大金太郎が科野へ移ったとあるが、品野城へ移ったとは記述されていない。

(五) 『張州雜志』

安永年間（一七七二〜一七八〇年）頃に着手し、天明八（一七八八）年に完成された通俗的な地誌で尾張藩士内藤東甫の著である。上品野村の項に次のようにある。

「城蹟二所 一ハ有「邑」ノ西戌ノ間「隔」河 古城志ニ曰永井民部少輔城墟自「村」西西戌之間而隔レ河東西十八丈南北十五丈二尺号「桑下」ノ之城ト「伝」云桑下ハ若上品野ノ別称也ト 尾陽雜記ニ云永井民部ハ内膳正家老也云云 城跡之圖（図略） 同一所 有「邑」之異 古城志ニ云春日井郡上品野村松平内膳正家重城墟在「干」東南之山「東西」十二丈南北四丈八尺 家重者櫻井内膳正源ノ重之嫡子今撰州河邊郡尼ヶ崎城主也 一書ニ云内膳正家重ハ清康公御伯父也 系図（略） 張州志畧ニ云若有隨筆ニ曰享禄二年巳丑徳川次郎三郎源清康君尾州ニ出張シテ品野村ニテ尾州勢ト合戦シ大ニ勝利ヲ得給ヒ松平内膳正家重ニ品野ヲ賜ヒケル夫ヨリ代々伝テ領知セリ内膳正家重ハ櫻井信定之男ニ 家忠日記曰弘治三年二月之條ニ品野城松平勘四郎信一云云又永禄元年三月條曰松平監物家次内膳正家重子尾州品野ヲ守ル信長率「兵」ヲ圍ミ「之」四方構「若」數箇所ヲ使メ「兵」ヲシテ守「之」政「品野」家次守「是」ヲ得ルヲ「利」數回今夜子ノ刻家次夜「討」敵陣ヲ「尾州」勢亂立家次乗「勝」ニ急ニ追討云云 図（略）」

また、下品野村の項に次のようにある。

「安戸坂 有「當」邑ト與今村之間 里老伝云中世今村ノ城ニ松原下総守廣長ト云人有品野村城主永井民部少輔ト此所ニ於テ合戦廣長戦死ス」

（こ）では、『古城志』、『尾陽雜記』、『古城絵図』（蓬左文庫所蔵）、『張州志畧』、『家忠日記』を引用しているが、家重の父が「櫻井内膳正源重之」と「櫻井信定」と二通りあったり、家重を「清康公御伯父」としたりして混乱が見られる。一方、里の老人の話として、永井民部少輔は品野村城主で今村城主松原下

禄二年に松平清康が落城させた城が科野城ではなく野呂城となっている。また、当時の野呂城主として坂井彦右衛門秀忠や桜木上野介の名があがっているなど、戦いの様子が他にはないほど詳細に記載されている。また、「尾州石ヶ瀬合戦付科野城軍松平信一夜討の事」では、永禄元年の科野城主を松平勘四郎信一とし、やはり戦いの様子が詳細に記載されている。

近世地誌類にみる桑下城と品野城

『瀬戸市史通史編上』によれば、品野地区には品野城、桑下城、山崎城、落合城、阿弥陀ヶ峰城、片草城の六カ所の城館が所在している。そのうち近世以前の文献に登場するのは、品野城、桑下城、片草城の三城である。片草城は(財)徳川黎明会所蔵・徳川林政史研究所保管の寛政四(一七九二)年八月作成の「春日井郡片草村絵図」と天保二二(一八四一)年六月作成の「春日井郡片草村絵図」に古城跡と記載されているのみであるため(『瀬戸市史資料編一 村絵図』)*、ここでは桑下城と品野城について見ていく。

(一)『寛文村々寛書』

寛文年中(一六七〇年前後)に藩撰された尾張一国の村勢一覧である。上品野村の項に次のようにある。

「一桑下古城跡壹ヶ所 東西三拾間南北四拾間 先年松平内膳家老、永井民部居城之由、今は柴山。」

ここでは、桑下の地名が初めて登場するが品野城についての記述はない。また、永井民部を松平内膳家老としている。

* 「春日井郡片草村絵図」には、「一、古城跡御座候得共城主名申伝無御座候」の記載がある。

(二)『尾張古城志』**

宝永五(一七〇八)年に天野信景がそれまでの地誌や巷説を集成して作成したものである。

「品野村 或桑下村此古称也東西二十間南北八間山頭也、自村辰巳之方 松平内膳正城跡 永井民部(割注 松平内膳正家臣) 城跡東西三十間南北四十二間一重堀自村西戌之方」

ここでは、桑下村は品野村の古称としている。また、城跡を品野城、桑下城ではなく、松平内膳正城跡、永井民部城跡と城主名で記述している。

(三)『張州府志』

元禄年間(一六八八〜一七〇四年)に編集に着手し、宝暦二(一七五二)年に藩の書物奉行である松平君山によって完成された尾張藩の官撰地誌である。古城の項に次のようにある。

「品野城二」在「上品野村」。或作「科野」。其一在「村東南山」。東西二十間。南北八間餘。松平内膳正家重居。此。若有隨筆曰。享祿二年。清康君出「兵尾州」。大戰勝之。取「品野城」。賜松平家重。又家忠日記曰。永祿元年三月。松平監物家次守「品野城」。織田信長使「兵圍」之。四面構「寨」。七日夜家次出「兵劫」寨。大敗斬「主將數人」。尾州軍解「圍退散」。其後城亦廢矣。其一在「村西北」。隔「河」山。東西三十間。南北四十二間。號「桑下城」。伝曰。永井民部少輔居。此。永井者曾屬「松平家重及其子家次」。後為「織田家臣」。

ここで初めて品野城、桑下城の記述が見られ、出典が隨筆と明確ではない。

** 『尾張古城志』は原本が伝存しておらず江戸後期の写本が残るのみであり、さらに写本により若干内容が異なる。ここでは、名古屋蓬左文庫所蔵のものを引用するが、これは天野信景著の原本を享保九(一七二四)年真燕が写し、更に天保六(一八三五)年奥村得義が写したものである。他の写本や類似書については、岡村弘子編『城からのぞむ 尾張の戦国時代』に詳しい。

郷ヲバ松平内前殿エツカワサル」

とあり、享祿二（一五二九）年頃、松平清康が攻略したシナ野の郷を松平内前殿（松平信定）に与えたとしている。

（二）『松平記』

慶長年間（一五九六～一六一五年）成立と考えられている著者不詳の徳川氏創業史である。

「永祿元年三月尾州科野城に、駿河より松平勘四郎大将にて三百にて籠る。（中略）然処に尾州衆科野の城に付城を拵、日々夜々のせり合也。或時松平勘四郎城より時分を見て夜討に寄、尾州衆付城の大將竹村孫七・磯田金平・戸崎九郎・滝山伝三、四人を初めよき者五十余人討取、無二比類一高名致し、義元御父子より松平勘四郎に感状給る。」

とあり、永祿元年の科野の城主を松平勘四郎（松平信一）としている。

（三）『家忠日記増補追加』

松平忠冬（一六二四～一七〇二）が徳川家康に仕えた曾祖父松平家忠の日記である『家忠日記』に書き加えたものである。

「（永祿元年戊午 筆者記）三月七日、松平監物家次尾州品野ノ城ヲ守ル、織田信長兵ヲ卒メ是ヲ圍、城ノ四方ニ砦ヲ構ルコト数ヶ所、軍士ヲシテ是ヲ守ルシメ、屢軍ヲ発シ品野ノ城ヲ攻撃、城將家次是ヲ拒テ利ヲ得ル事数回、今夜鶏鳴ノ時ニ及テ家次寄手ノ陣ヲ窺ヒ兵ヲ発テ襲ヒ戦フ、尾州ノ兵驚キ騷テ離散ス、家次勝ニ乗テ急ニ追撃、竹村孫七郎・磯田金平・戸崎九郎・滝山伝三郎等ヲ始テ五十余人ヲ撃テ首級ヲ得タリ、是ニ依テ品野ノ城ヲ圍ム織田カ兵悉ク退散ス、家次使ヲ此首ヲ持シメ駿州ニ献ス、大神君其軍功ヲ褒シ玉フ、又今川父子家次カ勇敢ヲ美称ス、感状ヲ授与ス」

とあり、永祿元年の品野の城主を松平監物家次としている。また、討取った敵兵名が『松平記』と微妙に違っている。

（四）『武徳編年集成』

大番頭を勤めた木村高敦がまとめた全九三巻の徳川家康一代記で、寛保元（一七四一）年に將軍徳川吉宗に献上されたという。

「同（永祿元戊午年 筆者記）三月 今川の下知を以て桜井の松平監物家次番手とし尾州の春日井郡科野の城を守る所に信長兵を率ひて城の四面に砦を築き軍士を籠て数回彼城を攻るといへども家次能拒ぎ守る ○七日 鶏鳴の比監物家次寄手の虚実を量り不意に是を襲ひ尾州勢尽く離散す、家次追撃して砦の守將竹村孫七郎・磯田金平・戸崎平九郎・瀧山伝藏以下五十余人の首級を 神君へ献ず（中略）同（永祿二己未年 筆者記）三月朔日 再び信長其勢一千余を以て尾州春日井郡科野の城を攻撃つ、義元の命に依て 神君の部將藤井の松平勘四郎信一後伊豆守に任ず当城の番手として堅固に拒ぎ守ると云々 ○三日 織田の軍兵今日まで昼夜を分たず科野の城を攻て死傷するもの百八十余人なり、今宵風雨烈し丑の刻に城將信一城外へ夜撃して大利を得、寄手又五十四人命を殞し百七十七人疵を被むる、信一此由注進しければ 神君御喜悅等閑ならず、義元よりも信一へ感牒を授く（中略）頃年（中略）尾州の知多・愛智・春日井三郡の内も今川に属し天文癸丑以來愛智郡鳴海城に岡部五郎兵衛真幸、笠寺の砦に葛山備中・三浦左馬助義就・飯尾豊前頭茲致実が父なり・浅井小四郎政敏、知多郡大高、愛智郡香掛両城に鶴殿三郎長持を籠おき春日井郡科野に徳川衆を入おき甚だ驕侈に誇り（以下略）」

とあり、永祿元年の科野の城主を松平家次、永祿二年の城主を松平信一として、織田信長の攻撃が二回あったと記載している。また、討取った敵兵名が上記二書とさらに微妙に違っている。

（五）『改正三河後風土記』

徳川幕府の奥儒者である成島司直が天保四（一八三三）年一〇月に『三河後風土記』を改撰したものである。「尾州岩崎・野呂城責の事」では、享

に將軍足利義満が土岐康行の乱の勲功の賞として土岐高山遠江守の所領であつた尾張国志那野・鳥原等を佐々木（京極）大膳大夫高秀に与えたことが見える（『愛知県史』資料編九、五七八・五七九号文書）*。

以下年代の古い順にあげていくと、

醍醐寺文書によれば、明德二（一三九二）年五月日の「熱田神領内注文案」に後円融上皇の院宣により熱田社座主宗助に返還された七ヶ所の熱田社座主領の一つに科野郷が見える（『瀬戸市史』資料編三、一八一号文書）。

同じく、応永九（一四〇二）年五月二八日の「尾張国目代光守注進状」と翌年八月一三日の「尾張国国衙一円進止地守護方押領注文案」に守護（斯波義重）方に押領されている国衙領の一つとして「竹河土 同科野島・有里島 給人津田中務」、「竹河土本新 同科野島・有里島 給人津田中務方」とある（『愛知県史』資料編九、八一・八三、四号文書）。

『建内記』の正長元（二四二八）年五月二二日の条に、中納言入道（万里小路）豊房が室町殿（足利義宣）に藤宰相入道永藤卿（高倉長藤）からの支配権の返却を直訴した五カ所のうちの一つに長講堂領であつた尾張国科野郷が見える（『瀬戸市史』資料編三、一九七号文書）。

熊野那智大社米良家文書によれば、文明一四（一四八二）年八月二九日の「檀那売券」に尾張国志那野の旦那を一〇貫文で那智実報院が買得したとある（『瀬戸市史』資料編三、二一七号文書）。

寛政七（一七九五）年成立の地誌『因幡志』に「船越氏所蔵」として採録された「今川義元感状写」に「於尾州科野城合戦夜討謀略、殊首数五十余級討取候事、粉骨之至令感喜候、仍太刀一腰金帛進入之候也、永禄元年四月朔日 今川義元 花押 船越五藤次殿」（『瀬戸市史』資料編三、二四一号文書）とあり、永禄元年に尾州科野城で合戦があつた事を伝える。

* 鳥原については、熱田神宮千秋家文書によれば、文永三（一二六六）年七月二八日の鎌倉幕府が熱田大宮司に宛てた「関東御教書写」の中に、熱田宮座主民部卿遍範に監妨された山田次郎重泰の所領として山田郡内鳥原村が出てくる（『瀬戸市史』資料編三、二一九号文書）。

また、年代は不明ながら、定光寺所蔵の『祠堂帳』には科野、科野片草、科野落合などの地名が出てくる。近世の片草村が中世には科野に含まれていたことがわかる（『瀬戸市史』資料編三、二九一号文書）。

一方、品野の字が使用された最古の史料としては、『士林浜廻丁之部二』がある（『瀬戸市史』資料編三、二七八号文書）。これによると慶長一一（一六〇六）年五月二四日に清洲藩主松平忠吉が春日井郡上品野村を吉田平内に与えたことがわかる。

その他、品野と表記される初期の例として、名古屋市蓬左文庫所蔵の古城絵図と『寛文村々覚書』がある。古城絵図は正保から承応期（一六四五〜一六五四年）に描かれたと考えられている（遠藤ほか一九九一）が、その中に桑下城を描いた春日井郡上品野村古城絵図と品野城を描いた春日井郡上品野山城絵図があり、桑下城と品野城が上品野村に所在する城として描かれている。また、寛文期（一六七〇年頃）成立の『寛文村々覚書』には、上品野村の他に中品野村と下品野村が出てくる。

徳川氏創業史等から見た品野での戦い

品野をめぐる織田氏と松平氏ないし今川氏との戦いについての記述は、織田方の史料には全く触れられておらず、徳川の世となった江戸時代に書かれた徳川氏創業史に多く記載されている。ここでは、代表的な徳川氏創業史を見ていく。

（一）『三河物語』

譜代の臣である大久保彦左衛門忠教が元和八（一六二二）年に脱稿した後、寛永三（一六二六）年以降まで補訂を続けた徳川氏創業史である。

「廿斗之時、尾張之国エ御手ヲ懸させ給ひて、岩崎・シナ野ト云郷ヲ切取給ひて、シナノ、

文献資料からみた桑下城と品野城

宇佐見 守

愛知県瀬戸市上品野町に所在する桑下城は、近年の発掘調査の結果、松平氏や今川氏による品野支配の拠点であった可能性が高くなってきた。そこで、桑下城と品野城に関連する文献を集成し比較することにより、文献資料からその補強ができないか検討してみた。その結果、従来品野城での出来事とされてきたことが、そうとは言えないことが判明した。

はじめに

(財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県瀬戸市上品野町に所在する桑下城跡の発掘調査を平成一六・一九・二〇年度の三カ年にわたり実施してきた。調査は城跡の北側部分に限定されるものの調査面積は八、三〇〇㎡におよぶ。上品野町には他に山城である品野城跡があり、享祿二(一五二九)年頃に松平清康(徳川家康の祖父)が攻略し松平信定(清康の叔父)に与えたことや、今川氏支配下の永祿元(一五六八)年に織田信長の攻撃を受けたが逆に夜討ちをかけ撃退したことなどの逸話が知られている。それに対して、桑下城跡は近世地誌類で内膳正(信定)の家老永井民部少輔の城跡と記載されるのみで、それ以上の詳

しいことはわからない。

しかし、桑下城跡の平成一九年度の調査で、本丸と本丸を巡る堀は自然地形の影響を受けない大規模な造成により築かれていることや、堀から出土した和鏡は京都の室町將軍家ゆかりの工房で作られた可能性が高いことなどがわかり、築城に今川氏が関与した可能性が高くなってきた(宇佐見二〇〇八)。また、平成二〇年度の調査で、本丸西側の曲輪群が大規模に造成される以前の城の形状を残すものであることがわかり(武部・小澤二〇〇九)、在地領主の城を侵攻してきた松平氏や今川氏が大規模に改修した可能性がますます高くなってきた。

これらの成果は、品野城と桑下城を別個に捉えるのではなく、桑下城を館城、品野城を詰めめの城と関連して捉える考え方(福島一九九一)の補強になると思われるが、今回桑下城と品野城に関連する文献を集成し比較することにより、文献資料からその補強ができないか検討していきたい。なお、掲載した文献は原則固有名詞を除き、旧字・異体字・変体仮名はそれぞれ現行の文字に改めた。

品野の地名について

瀬戸市品野地区をいつから漢字で品野と表記するようになったかは正確にはわからない。中世の史料では志那野・科野・志名野などと表記されており、品野の字を用いるようになったのは近世以降のようである。

「しなの」の史料上の初見は明徳元(一三九〇)年である*。佐々木文書によれば、四月二六日の「將軍足利義満袖判下文案」、「管領斯波義將施行状案」

* 猿投神社文書によれば、それより以前の正安二(一三〇〇)年の「熱田社領大郷早田検見目録案」に、「科野殿跡三丁」という文言がみえる(『瀬戸市史』資料編三、一三三三号文書)。この史料から当時大郷に科野殿跡と呼ばれる水田が三町あったことがわかるが、大郷は知多郡に比定されており、瀬戸市の科野とは直接的な関係はない。